

「一億の切なる願ひ島帰れ この間近なる岬に叫ぶ」
母の納沙布岬の歌碑に坂田文子の名が刻まれました。

医療法人社団 名寄中央整形外科院長

坂田 仁

私の母は帝国女子医専を卒業した女医でした。名寄で父と開業したのが昭和26年で、平成7年に脳梗塞で倒れるまでは、着物にかっぽう着で患者さんを診ていました。医師として名寄市立病院には大変お世話になり、患者さんの市立病院に送るタイミングは後輩医師として尊敬出来るものがありました。また、患者として脳梗塞そして肺炎で亡くなる時にも市立病院にお世話になりました。その母が根室市の納沙布岬に北方領土返還の歌碑を建立したのが昭和56年でした。この「一億の切なる願ひ島帰れ この間近なる岬に叫ぶ」という歌が刻まれた歌碑には作者である母の名前が載っていませんでした。30年近く風雪に耐えてきたこの歌碑の土台がいたんできたため、兄暉英の計らいで昨秋に新設され、母の名前が刻まれることになりました。なぜ納沙布岬の歌碑に名寄の歌人の歌が刻まれているのか、地元の歌人の方の反発もあったのではないかと思います。

でも、歌を詠んでみると心から北方領土の島々が日本に帰ってきて欲しいと願う気持ちがこもっているの、長い年月が経って母の名前を刻まれることが許されたのではないのでしょうか。

私は、母の歌碑を見に納沙布岬を訪れたのが2度で、そのうち1回が母の亡くなった後に妻と子供3人を連れて訪れました。今、歌碑に母の名前が入り、誇らしく思います。母の心に会いにまた納沙布岬を訪れようと思っています。

いつになればこの島々が日本に戻ってくるのか、早く帰ってきて、この歌碑がそんなことがあったんだというような時代が早く来ることを願っています。

(母は昭和62年に俳句、短歌などの文化活動の功勞により名寄市文化賞を受賞しました。また、名寄公園には「春の土尊きものの如く踏む」の句碑が立っています。)



図1 昭和56年に建立された納沙布岬の母の歌碑



図2 平成21年秋に建立された歌碑に母の名前が刻まれた